

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語に翻訳されたギリシャ人名
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	プロピレア , 23 : 9 - 11
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044335
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



再録論文（抄）

古浦敏生先生のギリシア語関係の論文としては、「イタリア語におけるギリシャ語法—イタリア語に翻訳されたギリシャ人名を中心として」『広島大学文学部紀要』第45巻1986, pp.453-472が挙げられます。後に古浦敏生『イタリア語文法研究』（2013, 文流）第Ⅲ部第5章（pp.249-278）に、「イタリア語に翻訳されたギリシャ人名」として再録されました。古浦先生らしい、詳細なデータを駆使した手堅い実証がなされ、分析の武器だった統計学の「有意差」も登場します。先生の学風（それは先生の個性でもありましたが）を忍ぶのにふさわしい御論考と考え、編集部が要約したものを以下に掲載します（誤植、誤解など一切の責任は編集部にあります。【 】は編集部の補足説明。）

イタリア語に翻訳されたギリシャ人名

古浦 敏生

古代ギリシャ語の語彙が現代イタリア語に取り入れられる場合、語末音-ςが消失したり（Σωκράτης > Sòcrate）、斜格由来の3音節語になったり（Πλάτων > Platòne）、二つ以上の語が共存する（Θαλής > Talète, Tàle）等の変化が起きる。（用例はいずれも古代ギリシャの哲学者名。）

本論文は、イタリア語に翻訳されたギリシャ人名（苗字。但し神や妖精名なども含む）に絞り、この音韻形態的变化を巡る以下の三つの疑問点の解明を試みる。

- (1) ギリシャ語の主格に由来する語形(Sòcrate)と斜格に由来する語形(Platòne)とどちらが多いか？
- (2) Talète, Tàleのようにアクセント位置に「ゆれ」の生じるのは全体の何パーセントなのか？
- (3) ギリシャ語のアクセント位置は、イタリア語ではどの程度保たれてれるのか？また、ずれる場合、何音節前後にずれるのか？

イタリア語におけるギリシャ借用語に関する先行研究である G. Malagoli, *L'accentazione italiana* 『イタリア語のアクセント付加』1968, Firenze は、ギリ

シャ語由来の借用語をアクセントに着目して 3 種に大別するが、借用の中間段階としてのラテン語アクセントが考慮されている。しかし、ラテン語のアクセントは、いわゆる自由アクセント(*free accent*)ではなく、ルールによって明確に決定されるし、このルールに従わないギリシャ語彙もあったわけであるから、起点であるギリシャ語と終着点であるイタリア語との両極を比較すればいよいよと筆者は考える。さらに、*Malagoli* は普通名詞・固有名詞(人名・地名あり)の区別なく選択しているが、やはり、一つのジャンルに絞って分析するのが適切であろう。

調査資料として、*La Magna, G. & Annaratone, A., Vocabolario greco-italiano* 『希伊辞典』1966², 1597, Milano を使用し、イタリア語のアクセント位置の確認のために、*Migliorini, B. & Tagliavini, C. & Fiorelli, P., Dizionario d'ortografia e di pronunzia* 『(イタリア語における)正書法・発音辞典』1969, Torino, ERI を用いる。調査により 359 種の用例が見つかった。以下、(1) 主格に由来する人名、(2) 斜格に由来する人名、(3) 語形またはアクセント位置のゆれている人名、の 3 種に分けて、それぞれの用例をギリシャ語のアルファベット順に提示しておこう。なお、ギリシャ語とイタリア語のアクセント母音の位置とが対応している場合には「0」(例 *Aiveías* と *Enèa*、*Δημήτηρ* (-τρος) と *Demètra*)、イタリア語のアクセント母音の位置がギリシャ語のそれよりも 1 音節前寄りの場合には「-1」(例 *Ἰπποκράτης* と *Ippòcrate*、*Λεωνίδας* と *Leònida*)、2 音節前寄りの場合には「-2」(例 *Ἡρακλῆς* と *Èracle*、*Σοφοκλῆς* と *Sòfocle*)、1 音節後寄りの場合には「+1」(例 *Ὅμηρος* と *Omèro*、*Ζήνων* (-ωνος) と *Zenóne*) と表記する。また、念のため、人名が男性の場合は「m」、女性の場合は「f」と表記する。

ギリシャ語	性	イタリア語	アクセントのずれ
Ἀγησίλαος	m	Agesilào	+1
Ἀγλαΐα	f	Aglàia	-1
Ἄγλαυρος	f	Aglàuro	+1
Ἀγχίσις	m	Anchìse	0
Ἄδμητος	m	Admèto	+1

【以下詳細な表が 12 ページにわたって続くが割愛】

上の表の分析に基づき、冒頭の三つの疑問には次のように答えられよう。

- (1) ギリシャ語の主格に由来する語形が 269 例(例 *Ἡσίοδος* と *Esìodo*、*Ἠλέκτρα* と *Elèttra*)、斜格に由来する語形が 56 例(例 *Ξενοφῶν* (-ῶντος) と *Senofónte*、*Ἄρτεμις* (-ιδος) と *Artèmide*)、ということで、前者のほうが断然多い。

(2) Θαλής「タレース」には Talète と Tàle の 2 形が共存しているが、このように、イタリア語において語形またはアクセント位置に「ゆれ」の生じているギリシヤ人名は 34 例で、全体の約 10% である（例 Ἀγαμέμνων と Agamènnone / Agamennóne、Γοργώ と Gòrgone / Gorgóne）。

(3) 両言語のアクセント位置のずれ。

ずれの音節数をまとめなおした次の表から、以下の(A), (B) が指摘できよう。

ずれ 由来	-2	-1	0	+1	+2	計
主格	12	78	135	44	0	269
斜格	0	0	21	35	0	56
計	12	78	156	79	0	325

(A) 主格由来の人名に関して、

①両言語間で約半数はアクセント位置がずれない（例 Ἄρης と Àres、Ἀφροδίτη と Afrodìte）。

②ずれる場合、イタリア語で前寄りにずれる場合のほうが多い（例 Ἀριστοφάνης と Aristòfane、Δανάη と Dànae）。

③ずれる場合、前後に 1 音節ずつずれる場合がほとんどである（前寄りにずれる場合の例は②、後寄りにずれる場合の例 Ἀλέξανδρος と Alessàndro、Δηϊάνειρα と Deianìra）。前寄りに 2 音節ずれる場合は稀であり（例 Θεμιστοκλῆς と Temìstocle、Ὠκεανός と Ocèano）、後寄りに 2 音節ずれることはない。

(B) 斜格由来の人名に関して、

①後寄りに 1 音節ずれる傾向がある（例 Δευκαλίων (-ωνος) と Deucalióne、Ἄστυνάαξ (-ακτος) と Astianàtte）。後寄りに 2 音節ずれることはない。

②前寄りにずれることはない。

【この後、語末要素（-α, -αῖος, -ας 等）によってイタリア語のアクセント位置に違いがあるのか、語末から数えて何番目の音節にアクセントが置かれるのか、イタリア人の苗字一般のアクセント位置と比較した場合違いがあるのか、などについて詳細な分析が続く。】